會員通信

破壊改造論

岩崎四郎

自然保護か開発かで論争の激しかった大雪山縦貫道路の建設は、環境庁が新ルートで承認したと新聞は報じている。一方、利尻、礼文の国立公園指定に伴なう編入問題で開発計画との調整が難航していたサロベツ原野開発も、道と道開発局との間で保護、開発区域の調整がついたとか。北海道も世間なみに問題が多い。北海道の自然公園は、いまも昔も観光業者と不動産業者に掻きまわされている。

ところで北海道の変身ぶりはどうなるのか。日本列島改造論で北海道の特色を再認識させたいものだ。本年の夏も相変わらず中央政府のお偉方がだいぶ来たが、本当の北海道の姿をつかんで行ったであろうか。本年もすでに新年度予算要求作業も後半を迎えた現在、各省がまちまちな施策であっては受け入れ側は迷惑する。とくに北海道は広大な土地があるから、どうにかなるだろうでは迷惑千万だ。広ければ広いほど、未開地であればより一層の交通整理をしっかりやる必要がある。

交通整理といえば開発計画が中央に上がる前に、どうして下部組織で調整がとれないものだろか。先般の全国知事会議で田中首相は「土地利用計画は、あくまでも知事がたてるものでなければならない」といっている。最近のニュースで道内不動産業者はもちろん、本州大手商社の土地買い占めで、森林組合がその犠牲となっている。日本列島改造論と北海道総合開発三期計画も全国のモデルとなるような利用計画はできないものだろうか。

（北海道造園建設業協同組合）

自然保護教育論と新しい生物教科書

金子明石

中学、高校、大学の現場教育しか経験したことのない私がちょっとしたきっかけから文部省へとびこんだのは、高等学校用理科教科書検定の真最中であった。それからの約一年半、連日教科書とのにらめっこである。生物学者として、私も環境問題には関心を持ちつづけてきた。自然保護や公害問題を論ずるとき、自然界の調和を充分に理解している人とそうでない人とでは、結論も問題解決へのアプローチのしかたも違ったものになるだろう。無機的環境と生物界は物質循環によって密に結びつき、生物界は生物相互の関連において成立っている。このことは生物学の中枢をなすものと考えられる。人類は人命尊重を叫びながら自然を破壊している。バランスをくずした自然からの思いがけないお返しにより人命が蝕ばまれている今日、生物教育が真の自然観をもつ人々を育成するのに重要な役割を果たすものと考える。

さて指導要領が改訂になって、生物教育はどうなるか。高校卒業までの理科の必須単位は6単位となり、物化生地のIから2科目をとるか、基礎理科かを最少限履修しなければならない。物化生地のIIは、その科目のIを履修した者が選択する。生物を中心としてみた場合の昭和五十一年三月からの高卒者は、(1)生物を履修せず、(2)生物Iだけ履修、(3)生物I、IIを履修、(4)基礎理科を履修、(5)基礎理科と生物IIを履修、の5通りが考えられる。生物的自然観をもった人が一人でも多くと願っている人達にとってはショッキングなことであろう。

四十八年度から使用される生物Iは13社14種（A～N）である。環境と生物についてなんらかの形で取扱っているのは、K、Nを除いた12種で、広い意味での環境保全に関連することまで触れているのが7種である。この7種について扱い方を大別してみると、生物分野の一つの項目の中で本文の一部として（G、I）、特別に章をもうけた中で（E）、教科書の終わりで（A、B、C、D、I）である。その大体の内容と量は次のようである。

A、機械文明の発達が自然や生物界を破壊（約1/4頁）。B、技術の増大がつくり出す環境の生命維持への影響（約1/3頁）。C、産業発展、人口の集中による大気や水の汚染、地盤沈下（約1/2頁）。D、DDTの蓄積、PCBによる汚染（約2頁）。E、人為的放射能の増加とその影響（約1/4頁）、農薬乱用、産業発達と公害、自然保護に対する科学的な対策、など（約1頁）。G、人工的な自然改造、河川の汚染（約1頁）。I、残留DDT（約1/2頁）、自然開発の吟味（約1/6頁）。

以上のべたように生物Iの教科書で、環

境問題に関する取扱いが少ないのは、生態が生物Ⅱの1項目になったことと関係があると推察される。しかし、高等学校学習指導要領解説書によれば、「生物Ⅰだけ履修しても、生物としてひと通りの基本概念の理解ができるようにしてある」とあり、52頁には、「特に生物Ⅰおよび生物Ⅱでは、生物の生活と環境との関連を重視し、生物の保護やさらに人間の生活環境としての自然保護について正しい認識を養うことが重要であり、……」とも書かれている。また高等学校学習指導要領（45年10月）の生物Ⅰの目標(3)、内容の取り扱いの(1)、(3)、(4)イ、にのべられている文章は、生物Ⅰの三つの大項目の中にあげられてなくても、環境と生物の関係は何らかの形で、生物Ⅰにおいても取り上げられてよいことを示していると考えられる。

こんどの改訂で指導要領の生物における内容の項目が大ざっぱなものとなったことが教科書を書く側にとって、特徴を出すのに役に立ったと思われる。バラエティに富んでいる14種の中から各学校の実状や、Ⅰだけで終えるかⅡまでやるかによって、教科書の選択がなされることが学習のキイポイントの一つになるのではないだろうか。

（文部省初等中等教育局教科書調査官）

旅をして

大原葉子

この八月に子供達が夏休みにはいるのを待ち私も休暇を頂戴し、留守を主人に託して道東の旅を楽しむことができた。脱・東京を決行して来た二人も加わり、愉快な五人の仲間と子供一人の、いとも気楽な旅となる。

昼は岩見沢の「いくらべんとう」「かまめし」とそれぞれ心楽しみにしていたところ、注文のはすべて無し。子供に「行く先々が案じられる」といわれながら旭川に着く。層雲峡に直行するのは惜しいということで、氷点の舞台になったという神楽の自然休養林を訪れる。まっすぐ延びたストローブマツ、ヨーロッパトウヒの幹が端正で美しく、ヒルガオの花の間を赤とんぼが飛びかう中を散策する。

層雲峡では、昨年この道端の小さな流れに子供がサンショウウオを見つけてよろこんだのを思い出し探してみたが、もうこのあたりにも住めなくなったのか見当たらなかった。水量の減った滝、頭上を覆う岩にと上を見ると、そそり立つ岩の裂れ目に真紅な花が一輪しがみつくように咲いていて、心なごむのを覚える。

朝八時、宿を発ち大雪トンネルを抜けると右手に大雪ダムの工事が目に入る。いま通っているこの道路から下すべてが水没のうき目に会うと聞き、産業開発と自然破壊の現実をまのあたりに見た子供は「もったいない」という。黒岳で枯れたまま淋しく立っている木は、洞爺丸台風で五十年分もの材木が一夜にして風倒木となった名ごりと聞いて来たばかりで、そしてまたこの広大な原生林が人の手で失われてしまうことは、子供心をも痛めたようである。

石北峠、北見を経て網走にはいり、大観山より網走湖を望む。湖と空の淡いコバルトが目にしみる。新鮮な緑の中にヤマハギの咲き乱れる中を天都山に向かうが、ここは人々々。

小清水の原生花園は時期的にもう遅いと聞かされて来たが、こぼれるようなハマナスの花と、さわやかな芳香が皆をよろこばせてくれる。優美な藻琴山のスカイラインを背に、のどかに放牧された牛馬とともに写真におさまり、オホーツクの海岸線を走りウトロに向かう。

小鳥のさえずりで目がさめ、朝まだき知床五湖に行く。蛙の大合唱に迎えられながら、クマザサを分け入るように一本道を進むと、神秘さを漂わせた湖水に出る。霧が徐々に晴れ、水面に映る白樺の清楚な美しさに思わず目を見張る。どこまでもどこまでも静かに深い湖。どうかこの知床五湖だけは、このまま静かにしておいてほしい。

湖があればホテル、みやげ品の売店がつきものの日本の観光地。おざなり的な観光資源の開発の名のもとに、この日の午後訪れた摩周湖の、砦のような展望台には本当に失望した。子供とともに限りなく恵まれた旅をしながら、大事な自然の宝をもうこれ以上失ってはならない。そしてこの恵まれた環境で、大自然の生命を存分に呼吸し、たくましく成長してと願いつつ旅を終える。

（主婦）

東京で北海道を考える

竜造寺直子

東京の下町黒田のわが家にも、どこで鳴くのかコオロギの声が聞こえ、手狭な庭の、柿やざくろなどの黄ばんだ葉っぱが、平坦な四季にかすかな白い線を引いてくれます。

隅田の川べり蔵前近くにある会社、その十一階の食堂からも、上野の山や東京タワー、風の強い日には遠くに丹沢の山脈までも見える時があります。こんな都会に暮し、混雑した地下鉄で行き来していると、「自然は生とし生けるものの母胎である」などはもちろん、このコンクリートの下が大地なのだ、ということさえ忘れがちな私達です。

私は朝が気持良かったり会社でイヤなことが起きると、急に山や農村が恋しくなり、安堵感と懐しさの覚える東北へ出かけます。尾瀬は晩秋の頃やワタスゲの頃、山々に囲まれとっぷり包まれた気分にはほっとします。また、羽黒の町は雪解の頃、秋の取入の頃など気負うことなしに受け入れられる風景です。

北海道へは、お嫁に行った友人の便りや「北国の動物たち」の本、そのほか雑誌ポスターなどから、いつかは訪ねてみようと思いながら暇がなかったり、東北へ足が向いてしまったり、津軽海峡が負担に思われたりで、はじめて訪ねたのは一年前五月の連休でした。四時間の船旅の後雪をかぶった山々を見て、とっても遠くへ来てしまったような気持でした。函館を過ぎると、もう目新らしい風景です。山の麓まで耕された畑の線には広さを感じ、夏には一面の高山植物が風にゆれ、ヒグマが出没すると聞く大雪山の山々や針葉樹には、近づき難い高貴なものを感じました。

サロベツ原野は、ミゾレ混りの強風に、笹ばかりの丘陵が大きく波打ち、人影のない駅を追いつつ走る汽車の行く先には、本当に人の住むところがあるのかしらと不安になってしまいました。こんな自然の中で子供達は元気に土手を駆けまわり、鯉のぼりは広い空で泳ぎ、堆肥を山積した馬車は田んぼを行きかい、あねさんかぶりで働く姿など、車窓からの人々の生活は忘れられないことです。そして、屋根が重なり合う屋上の庭で、草花を育てている都会の人々からは、想像もつかぬエネルギーに思われてなりません。

札幌までの汽車の中では、姪の結婚式で集まったというおばさん達が、余市の町や美唄の病院の仕事の話しを聞せてくれたり赤飯を置いていってくれたりしました。また、羊蹄山とニセコの山に囲まれた倶知安が好きだと、有島武郎の農場のことやアイヌの土器のことなど、身を乗り出して語ってくれた人もありました。

毎年シーズンになると、多くの若い人々が北海道へ渡ります。オホーツクの海、サロベツの原野、知床五湖など、ほかの地方には見られぬ豊かな自然が残されている北海道、たしかにこれらも愛すべき北海道に違いないのだけれど、やはりどんなわずかでも、どこかに人の匂と人のぬくもりと生活のある北海道が、また、私を旅へ誘います。

（ライオン歯磨（株））

山で想ったこと

小池保子

木々の色づく様子を見るにつけ、四季の変化に富む自然を身近に持つ嬉しさを特に感じ、折りにふれ日常生活から離れ自然との対話に心がけるように努めております。

この夏、親しい人達と勇駒別温泉に泊り、緑が一段と映える清々しい空気を思う存分吸って、ロープウェーで旭岳に登りました。日曜日のせいか幾組かの家族連れが同じゴンドラに乗り合わせ、三十代と覚しきご夫婦が幾組、小学生、そして未就学児の一行でお互いに〃先生〃と呼び合っておりましたので、きっとどこかの学校の先生のご家族と思っておりました。自然の中での親と子の語り合いがなされる姿を想像して、ほほえましく眺めつつ姿見の池駅に着いて改めてそれらの一行を見ましたときに虫とり網、そして籠を持っているのに気づきました。持って来た網などは駅に預けて来たようですが、小さい子供がロープで張られた歩道からトコトコ離れて高山植物群落にはいって行くではありませんか。

その後に従う両親は何も気にとめていない様子、幼い子供にとり車の心配のない広びろとした場所だけに、思わずとび回るのは無理のないところですが、見ておりまして精一杯美しく咲いているアオノツガザクラ、チングルマ、キバナシャクナゲなどがいたんでは大変と、子供達に思わず声をかけ、みんなと同じ方向に歩くよう注意をしました。

このような場所でこそ、自然教育をお母さんから子供に直接与えることができる結構な機会であり、子供にとり社会性を身につける一つの手だてになると痛感するとともに、現在の幼児や小中学校のカリキュラムの中に自然を愛する精神的基礎を育成するべきと考えさせられました。自然は国民の共有のものですから誰でも容易にその景観を見る機会を与えられるべきで、永遠に残るように自然保護思想が普及され、みんなで大切に扱いたいものです。

最近、中国に行かれた方から聞いた話ですが、博物館に行った折り、柵も鎖もなく静かな雰囲気の中で文化的遺産が展示され

ているのに驚き、案内の人に質問したところ、展示物が紛失したり壊されたりすることはまったくないとのこと。つまり〃人民のものですから〃という回答が戻って来たとのことでした。

日本人の心を端的に表現したものに道元の歌〃春は花夏ほととぎす秋は月、冬雪さえて冷しかりけり〃とありますが、季節の移りかわりに託し、永遠なるものと瞬間的なものを調和し絶えず真実を探究して来た日本民族、自然を歌った芸術作品が現在まで受け継がれて来ております。私はこの中国の話を聞きまして、みんなのものであるからみんなで大切に保存しようという姿勢、自然との調和に敏感である日本人の国民性から推して、を守ることに対しても同じ姿勢でありたいと心から思うのです。

（婦人公論「白雪会」）

秋の北海道を旅して

中村芳男

私が北海道行きを決めたのは、小山長官が大雪の道路建設を始めの計画より少しずらしただけであるにもかかわらず、許可の方針を打ち出したことをNHK、朝日、読売、サンケイからの電話で事態の切迫を知ったこと、また少し以前に渡欧直前の井手先生とお会いしたときに、ご帰国は十月二日頃とうかがっていたのでその頃にでもと予定したのでした。大雪の問題を論ずるにも、現地を知らずに語ることはできません。ある新聞社などからは即刻出発できないかといってきましたが、種々と用事もあるので、やはり予定の二日に発ちました。今回の旅行では辻井先生はじめ西村さん、百武さん、その他の皆様に一方ならぬお世話をいただき心から感謝しております。皆様のご尽力がなかったら、目的を達することができなかったであろうと思います。

空港からのバスに乗り札幌に降りたとたんに辻井先生の例のパイプが見え、なつかしくそして嬉しく思いました（そのうえ渡辺夫人までが来合わせておられたのですから）。渡辺夫人の独身当時、国立公園協会でしばしばおいしいお茶をいれていただいたものでした。グランドホテルで伊藤先生斎藤雄一先生、斎藤春雄先生、辻井先生との夕食は楽しく、また光栄でした。先生方は皆さん大雪の道路には反対であり、ある先生のごときは激越なまでの論旨を感ぜられたのです。翌日、準備された会場でお話をし、記者会見をしたのですが、そのときの私が「反対である」ということを表現する言葉がいかに弱かったかということは、あの大雪をこの目でみてから、しみじみと思ったことでした。私のような浅学の者が先生方の前でお話をするなどはおこがましいことですが、とにかくありがとうございました（皆様の暖かいご支援により目立つ失敗もなく）。

私は「大雪」を中心にして若い人たちとじゅうぶんに語り合い、残りの時間をひとりでゆっくりと見て歩こうと考えていたのですが、新聞社の方々と会見したり、札幌では道庁の生活環境部長さんや自然保護課長さん、釧路では市長さんやその他の方達とお会いしたり、種々と予定が組まれていてちょっと残念でした。しかし、以前から会いたいと願っていた道庁の方達ともお目にかかれて嬉しく思います。

西村さんのご案内で支笏湖畔を出発、苫小牧では昨年掘り出されたという四、五百年前のアイヌの丸木舟を見せていただき、それから日勝峠を越え、新得、足を経て十勝川に沿って源流近くオプタテシケ山を指呼の間に見るところまで行きました。さらに戻ってまた悪路を車を駆りトムラウシ温泉の上を行き、海抜九〇〇m余のところで今度は十勝岳方面へかけて見渡しました。私どもの足許からはじまる紅葉や黄葉は、おかされたことのない自然の色の鮮やかさに、いまにもその色がしたたるのではないかと思うほどの美しさで、まだ接したことがない素晴らしいものでした。その見事さを早速、留守宅の皆に手紙をしたほどです。

エゾマツ、トドマツの男性的な姿態がさながら仲間を守り抱えるように屹立し、オプタテシケやその右のトムラウシ、左の美瑛富士、美瑛岳につづき、頂にもう雪がきはじめている山々は麓の森林の信頼を受けとめるごとくそびえている。私には、まるで映画の大映しから遠景にいたるズームのように見えました。この美しいもの、荘厳なまでに神々しいものを毀とうとするものに対する怒りが胸を突いて、身内がふるえる思いにかられました。

このほかにユーフツ湿原も見せていただきましたし、釧路の大湿原も見てきました。「△×不動産」「○×産業」と道ばたにある所有の先取りを主張している看板や、汚ないゴミが湿原に舞いちらばっているのも、どこも同じことながら苦々しく見ました。

そのあと同じ場所を函館から丘珠、丘珠から帯広へと飛んでみましたが高いところから下を眺めるだけの価値判断と車でいって、ある地点で土を踏んで立った実感と、

さらに一歩一歩汗しながら歩いてそれを直ぐに手に触わり足でふまえた人とでは「貴重さ」を感じとることに非常なへだたりがあるということをじゅうぶんにさとることができました。だからこそ今回の大雪についても、一国の大臣であるからとて二、三の意見に動かされて許可するのは甚だしい行きすぎであると思います。まず、歩いた人、守った人に聞くべきだし、そのほかに開発屋も国民ですし木を伐りたい人も、観光屋も、運送屋も、土木屋にも、それぞれの立場からの意見をじゅうぶんに聞くべきだと思うのです。

国土はあくまで国民のものです。林野庁のものでも行政庁のものでも、もちろん政府の要人のものでもない筈が〝伐らなけりや帳簿が合わぬ〟で伐ったり、〝列島を改造せにや〟で埋めたてたり、そんなことではならない筈です。

あの大雪の荘厳なまでに美しいところに道路を走らすことを、われわれはもう一度深く考えてみたいのです。表向きは産業道路とのことですが、あの山道をべこべこまわり、長時間かけて荷物満載の車が走る必要がどこにあるのだろうか。

神々しい山肌は工事により踏みにじられ切りさいなまれ、禿げた場所は膏薬を貼るようにコンクリートを吹きつけられてごまかされ、台風のたびに「落石注意」や「路肩弱し」に肝をひやしながらの走行も楽ではあるまいと思います。しかもあの山越えで出せるスピードは、せいぜい一五キロから二〇キロがやっとだろうと思われ、大雪山系を迂廻する平地の道路よりわずか四・七キロ短くなっただけというだけでは、大雪の道路は明らかに観光目的にほかならないのですね。さらに過疎対策があげられていますが、スカイラインを造ることが過疎対策に果たしてどの程度の関連があると思いますか。スカイラインができて返って、附近の過疎が強まった例が沢山あるのです（もっとも、道路工事中という仕事はありますが）。

いま各地で多目的林道と称する観光道路が盛んです。山梨県などはその一例です。また白山スーパー林道については、この林道の南半分を受けもつ岐阜県側で林道なのだから、

イ、乗用車を通さぬこと。ロ、道路巾を四米以上に広げぬこと。ハ、路肩を丈夫にするだけにし舗装をせぬこと。

を県に申入れた団体があり、現在はそのままであるそうです。林道の目的はそれで充分なのですから。

石川県側では新たにできる港へ運ばれてくる用材を直接太平洋岸へ出すのが目的だそうですから、それでいいのではないかと思うのですが〝この申し入れには弱っている〟ともきいています。港がまだ完成しないうちに、林道の方が一歩早くできそうです。林道問題の折衝の相手がいつでも観光課であることもおかしいのですが、観光課は商工部の中にあるからでしょうか。

大雪の道路が万一できることがあっても（願わないことですが）、絶対に乗用車は閉め出してもらいたいものです。神聖なる自然を破壊するスカイラインの構想が一代議士の顔を売るために計画されたり、そのことにより莫大な利益をもくろむ一部の事業家の腹をこやすためであったりしてはならないのです。いままでのわれわれの仲間はあまりにも立派な者ばかりで「政治と選挙のくされ縁を悲しむ」ばかりで積極的には動いていませんでしたが、悲しむばかりではなく、いまこそ力を合わせて立ち上がるときではないでしょうか。その時期もすでに遅いと思われるようですが、いまからでもわれわれの道徳論議でたたかうことの必要が大ありです。

それから環境庁と審議会についてですが私の考えでは環境庁というものは、住民の側にたった施策を常に考え実施してゆくのでなければならないのに、企業サイドでしかものを考えない気がするのです。たとえば国立公園を定めるとき、昔はこれをいかに国民に利用させるかということが基本的姿勢の一つであったそうですから、大雪もそうだったわけでしょう。ところが経済社会が進展し消費生活がすすんでくるにしたがって、昔きめた利用に対する価値観が当然変わってくるわけです。

かつて尾瀬の道路問題が起こったとき国立公園協会の千家理事長が「確かにあの道路問題を審議するとき、われわれも参加し賛成した。だが四年後の今日、このように消費生活が進展し、マイカー族に荒されるということが爆発的な問題となってくることは想像できなかった」と卒直に「不明であった」と述べられ、尾瀬の自然を守る会の「道路建設反対」に賛意を示されたとき大きな拍手が湧いたがあの時の光景をいまもはっきりと覚えています。そういうもろもろのことをふまえて「大雪の道路は建設すべきでない」とハッキリ仰言ったのが大石前長官だったことは周知のとおりです。そしてそれが環境庁の方針となったはずなのに、大臣が代ったら忽ち反対の方針になるというのは、朝令暮改以上にはなはだしいことと思います。このようなことについて、われわれは自民党自体の責任として問いたいものです。

道路を拓いたために大きな災害につなが

ってしまった実例を数多く知りますが、これらの綜合は一人の長官の見聞の比ではありません。戦後の日本が治山治水にかけた費用は戦前の一〇倍といわれますが、災害で死ぬ人が五倍にふえているといいます。くり返しになりますが「神々の座」とも称される大雪の山脈に、みにくい肌をさらけ出した道路が延々とつづくことに我慢ができません。よい空気もよい水もよい景色もみんなわれわれの精神生活と無関係ではあり得ないことです。私達は子孫に何を残してやれるだろう。藻岩山へ登って札幌の街を見おろしたとき、はるか日本海が見渡せましたが、ひしめくコンクリートの建物や工場の煙をみて、ふと大きな墓場に見えました。申しわけありませんが、本当にそう感じたのです。私は札幌という街はもっと緑豊かな素晴らしい町だと思い、あこがれていたので失望も大きいものでした。このたびの旅行をふりかえって、もう一度様々と学び反省しております。

あの大雪の山脈（やまなみ）、釧路の湿原や美々川の周辺、紺碧の湖、そして常にそれらをとりまく自然林がいまも網膜に鮮やかに残っています。そちらへうかがったことを、本当によかったと思っております。そして浅学の自分でも力一杯自然の保全に当ってゆかねばならぬことを改めて痛感しています。そのために北海道の自然保護協会の一員に加えていただきました。なにとぞよろしくお願いします。

（全国自然保護連合・理事長）

幻の上高地

大田正豁

北海道を離れ、中部山岳国立公園管理員として上高地へ赴任したのは、二年半ほど前の五月でした。朝日、夕日の当たるたびに残雪が光り輝く穂高の山々をわが家のテラスから仰ぎ見て感動し、ニリンソウの花が咲き乱れる中の散歩を楽しみ、裏の清水川で鳴くミソサザイの歌に聞きほれていられたのも、七月初旬までの短期間だけでした。

梅雨あけと同時に、上高地は登山者、ハイカー、キャンパー、観光客があふれ、鳥の声も雑踏にかき消され、穂高岳の屋望台・河童橋は鈴なりの人を乗せて、早朝から夜まで揺れ動きつづけるようになったのです。いつもなら松本から一時間半たらずで達する道も車で埋まり、四時間、五時間かかるのは普通のことでした。

梓川の両岸に伸びた細長く、狭い上高地に一日一万五千人もの人がやってくることを想像してみて下さい。駐車場からあふれ出た車は狭い車道に並び、河原はもちろんササの中にまで突込んで停められます。散歩道も人で埋まり、そのけん騒と、携帯ラジオから流れ出る浅薄な流行歌は、梓川のせせらぎさえもかき消してしまうのです。あとに残るのは、私どもが一日、二〇人以上の学生アルバイトを動員しても処理し切れないゴミの山だけです。

上高地への到達路、国道一五八号線は、現在二車線の完全舗装の道にすべく改良工事が進められています。完成すれば一日三万人も五万人もの人がやってくることでしょう。その頃には、ウエストンのたたえた神秘的な上高地の美は失われ、これら観光客のために宿泊施設、大駐車場、休憩施設、公衆便所、上下水道、し尿処理場など、ありとあらゆる必要な施設が梓川の両岸に立ち並び、カラマツやケショウヤナギなど、上高地の美を構成している木々までも伐り払われてしまうことでしょう。

ここで私は、自然状態を保った地域が、電車やバスには定員があるように一定の収容力があることを訴えたいのです。なぜなら、とくに山岳地帯のように破壊に対して弱い自然の保護を論ずるときに必要なことは、その地域の収容力を算定し、限界以上の人が立ち入ることを規制することが第一だからです。そうしない限り自然は破壊されてしまうのです。いま、全国各地に起きている公害は、自然の浄化、復元能力を越す人間の干渉があったからこそ起こったことを忘れてはなりません。

この解決のために、上高地の玄関の、中の湯温泉近くの細池と呼ばれる盆地に大駐車場を設け、大正池の下までモノレールかロープウエイをかけ、上高地へは車を乗り入れない。このモノレールやロープウエイの運搬能力は上高地の定員以下に抑え、常に静かな上高地を探勝できる状態に置く。私は、この二点を原則とする方策を立て、上高地の将来像としたのです。今年度からこの案を環境庁で正式に調査を開始しましたが、上高地を離れたいま、冬期間だけでなく、静寂な上高地がいつでも味わえることを夢に描いているのです。

（富山県自然保護室勤務）